

共に真向うから攻撃、満場息をのむ試合となった。前半、窪田寝技にもち込み、型になりかけるが、秀島しのぐ、中盤秀島のすくい投げに明大ベンチ全員立ち上がったが場外。一分をきったところで窪田につかれが見え、秀島

のチャンスかと思われたが、結局引分け。

大型選手に堂々と立ち向う秀島の姿勢に明大主将のプライドを見た。引分け試合ながらも明治陣の志気大いに上る。

大漣―中村

中村は本年度の学生無差別級と八五kg級のタイトルル保持者、大漣は九五kg級のチャンピオン、実力者同士の戦いとなったが一進一退をくり返して引分けとなる。

中嶋―岩田

本大会明治にとって中嶋の不調は誤算であった。昨年の全日本選手権で上位にくい込んでいる中嶋はどの場面でもポイントを期待できる選手である。しかし不調を脱しきれず、開始早々から受けに回ってしまった。結局、内股有効から抑えられ一本寸前にのがれたが技有りとなる。その後も逆転の態勢になることが出来ず時間となった。

松本―松村

一点を背負った松本にあせりはなかったが、一分すぎ松村の得意技小外掛けに横転有

効を失う。去年の決勝でも同じだったがポイントをとられても、力まないのが松本の真骨頂、バタバタ攻めると相手に守りのパターンを作らせてしまうことをよく知っている。あわてず引手をとった瞬間の技だった。

山本―北田

山本、北田ともに中量級、北田は学生チャンピオンで四年生、二年生の山本とはキャリアに差があるが、山本はベンチの指示通り沈着に戦い引分け。一分をきって受けた組手指導はこの場面ではいたし方ないところ。かくて明治の連続優勝が決った。

副将松本昌広はチームとしても、また自身もリードを許す苦しい展開に焦りはなかったと語っている。「自分が苦しい時は相手も苦しいはずだ」と常々頭にたたき込まれている言葉を胸に、自分の組手になれば絶対とれる相手だと信じあわてずチャンスを作ったという。

「やるだけやった」という言葉を安易に使いたくはないが、あれほどの稽古をこなした部員たちにとっては、もし敗れたとしても悔は残らなかつたに違いない。

五回目となった連続優勝であるが現在の部の

背景を考えた時、今回の連覇は一際中身のある勝利といえよう。

### 全日本学生柔道体重別選手権大会

10月9日 日本武道館

95 kg級

優勝 大漣賢司(明大)

71 kg級

優勝 秀島大介(明大)

### 全日本柔道選手権大会

4月29日 日本武道館

明柔旋風吹く 同門対決小川四連覇  
学生大漣二位、松本、中嶋もベスト8

平成四年、柔道日本一を決める全日本柔道選手権大会が四月二十九日、日本武道館で行われ、OB小川(JRA)が決勝で後輩大漣賢司を下して四連覇を達成した。

小川は初戦こそ優勢勝だったが、残り四試合は一本勝ち、決勝は史上三度目の明柔対決となりOB小川が横四方で学生大漣を抑えた。

全日本選手権大会の同門決勝戦は過去二回、神永(OB)対坂口(学生)、篠巻(OB)対河原月夫(学生)がある。

本大会明大勢の活躍はめざましく、東京代表で出場した松本昌広(三年)、中嶋和也(三年)もベスト8まで勝ち上り黄金時代再来を思わせた。

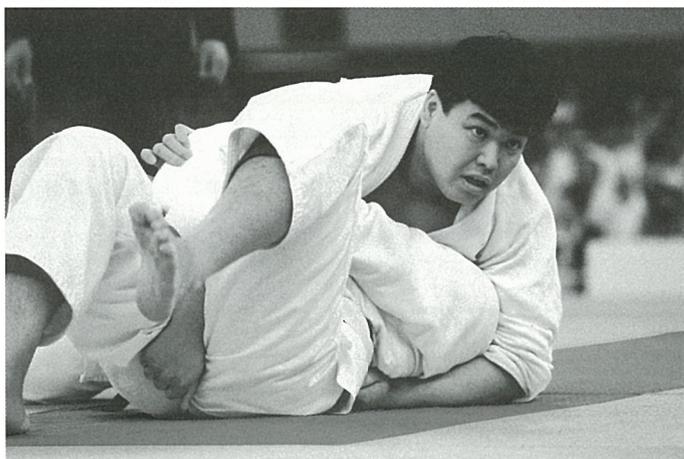
## 仲間の健闘に満足

「まさか、あいつと決勝でやるとは思わなかった、冗談が本当になって……。それにしても、みんな頑張った」と小川。「自分でも決勝に出られるなんて思ってもませんでした」初出場ながら、初戦で強豪の関根を倒して波にのった大漣は笑顔を見せる。

「関根さんにはどうしても勝ちたかった。あとは上がれるところまで思い切ってやろうと思っていたのですが」と大漣。明治からは小川を含め出場者四名が全員ベスト8に進出。「いっしょに上がれてよかった」と四年生らしく同門の健闘を喜んだ。

## 全日本選手権大会出場者

小川直也、大漣賢司、松本昌広、中嶋一也



小川直也、決勝で後輩の大漣賢司を押さえ込み、4年連続で日本一となる

## バルセロナ・オリンピック

7月10日 スペイン

### 吉田輝く「金」

日本柔道の神髄を見せる

バルセロナ・オリンピック柔道男子78kg級で吉田秀彦がジェーンソン・モリス(米)を破って優勝し、待望の金メダルを獲得した。昨

年の世界選手権三位の吉田は、得意の内股を軸に勝ち進み、準決勝では世界選手権二位のハン・ラーワ(ベルギー)、決勝でモリスを内股で降し、全試合一本勝ちで頂点に立った。

### 抜群の技の切れ

天下一品の内股だった。何度も仕かけられ、守勢一方のモリス、腰を引き、引き手を切つて間合をとるのに懸命、しかし、引き手を得意のそで口にこだわらなかつた吉田、そでの内側をとると相手の動きを十分にとらえて内股一閃、三分三十五秒、モリスの体は人形のように飛んだ。

抜群の切れを持つこの内股。国内では「吉田スペシャル」できこえている。その伝家の宝刀が最高の国際大会で十二分に威力を発揮した。

六試合すべて一本勝ちだったが、そのうち四試合を内股で仕とめた吉田の内股は天性の下半身のバネを生かし、はね上げて内側に巻き込む。執ようで粘り強い独特のものだ。

いづれ世界を狙える技と周囲は期待していたが見事に応えてくれた。その素質に独自の磨きをかけていった日頃の猛練習を忘れてはなるまい。

## 吉田「金」へのVTR

78 kg以下級

### 〔一回戦〕

吉田秀彦（18秒内股）  
ファンダール  
（スウェーデン）

吉田の完勝。スタンドから祈るように声援する日本陣営に気迫満点の柔道でこたえる。得意の左内股一発。豪快に投げ飛ばし、わずか十八秒で一本勝ちした。

### 〔二回戦〕

吉田（17秒大外刈り）  
サイカリ  
（レバノン）

吉田の技がさえわたる。サイカリを十分の組み手でつかまえると、場外際に狙いすました左の大外刈りを放つ。これがものの見事に決まり、二回戦も十七秒の速攻柔道で圧勝。

### 〔三回戦〕

吉田（2分42秒大崩れ）  
上四方固め  
ガルシア  
（アルゼンチン）

吉田が安定した柔道で勝ち上がる。横倒しになったガルシアをすかさず決めにかかる吉田。寝技の基本通りに腕を固めると、そのまますかさず崩れ上四方固め。そのない攻め

でがっちり押さえ込み、一本勝ちした。

### 〔四回戦〕

吉田（4分59秒内股）  
シウベ  
（ルーマニア）

しぶといシウベに吉田はなかなか技をかけられない。だが、小内刈りで有効を奪うと、シウベが焦って突っ込んでくるそこを終了寸前左の内股で投げ飛ばす。鮮やかに決まって一本勝ち。

### 〔準決勝戦〕

吉田（4分39秒内股）  
ラーツ  
（ベルギー）

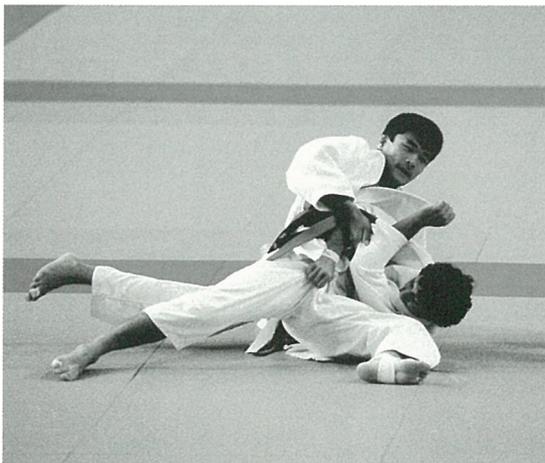
相手は昨年の世界選手権二位の強敵・ラーツ。気迫で向かってくる選手だ。しかし、吉田は焦らず自分の組み手で勝負する。左の内股を放つと効果。その後も攻め手を緩めず吉田のペースで、ラーツに指導が与えられる。最後は帯を取りにきたラーツにきれいに内股を決めた。

### 〔決勝戦〕

吉田（3分53秒内股）  
モリス  
（米国）

吉田の決勝の相手はジェーソン・モリス。金炳周（韓国）が勝ち上がってくると予想されたが金は四回戦でまさかの敗退。吉田にはやりやすい相手となった。気合十分で決勝に臨んだ吉田。吉田の左組みに対しモリスは右組みとケンカ四つだが、吉田は意に介さない。自分優位の組み手で攻めまくる。

出足こそ「赤畳五秒ルール」で指導を奪われたが、すかさず左内股で有効を取り返す。



バルセロナ五輪三回戦、ガルシアを押さえ込む吉田

吉田は攻め手を緩めず、内股を連発。モリスにまったく攻める機会を与えず、指導を奪った。

完全に吉田は試合のペースをものにする。逃げ腰になったモリスを仕留めたのは、やはり十八番の左内股だった。モリスの体が飛ぶように一回転し、鮮やかな一本勝ち。三分五十三秒の間攻め続けた吉田が悲願の金メダルを獲得した。

## 六人オール一本は史上初

吉田が初戦から決勝まですべて一本勝ちで金メダルを手にしたが、日本選手がオール一本勝ちで五輪を制したのは吉田が四人目。

これまでは東京大会軽量級(六八kg以下)中谷雄英、ミュンヘン大会軽中量級(七〇kg以下)の野村豊和、そしてロサンゼルス大会無差別級の山下泰裕の三人だけ。しかし、吉田の六度の一本勝ちが日本選手として五輪史上最多となる。

## 減量克服、鋭い切れ味

一回戦から決勝まで六戦全て一本勝ち。うち四本は内股だった。上村監督からは「技を掛けたら投げ切るまで、相手の柔道着を離す

な」と気合を入れられていた。その言葉を忠実に守ったのだろう。宙に舞った相手の体が回り過ぎて背中から落ちなかったほど。恐ろしいまでの切れ味だった。

「とにかく組めば何とかなると思っていた」と吉田はいう。内股で徹底的に攻めたのは作戦ではなく「自然に出た。体が覚えこんでいるから」初戦のファダル(スーダン)はわずかに十八秒で仕留めた。準決勝、世界選手権二位のラーツ(ベルギー)も敵ではなかった。

決勝の相手は米国の新鋭、モリス。腰を引き、足を取るそぶりを見せてけん制に出た。しかしすべてが徒労。三分五十三秒に「必殺技」が決まる。吉田は両こぶしを突き上げて歓喜を表した。

「夢じゃないか」という吉田の傍らで、母校の明大・原監督も「外国選手のご闘節の固さを突いたね」と興奮だ。体にバネのきいた吉田が股の間に足を差し込み、跳ね上げると、この闘節の硬い外国人選手は我慢し切れず落ちてしまう。吉田が昔から「外国人キラー」として知られるのも、最大の武器が内股だからである。

吉田と言えども一つ「減量苦」の三文字がつきまとってきた。昨年の世界選手権も減量の失敗で三位に終わった。その反省から今回

は専門の栄養士を付けての食事管理。精密な減量計画のおかげで四日前にはリミットは切っていた。前日の計量で計ったら七七・七kg。吉田には「スリーセブンの打ち止めだ」とパチンコに引つ掛けて軽口をたたくほど余裕があった。

柔道待望の金メダル。それに加えて勝ち方が良かった。押し合いへし合いの「JUDO」に食傷気味の観客も大きな拍手で勝利をたたえた。「柔道」の神髄に触れたことへの感謝だった。(日本経済新聞)

## 明治大学から「特別功労賞」

吉田秀彦に母校の明大から特別功労賞が贈られることになった。明大学長が七月三十一日、「あの優勝は特別功労賞の価値はある」と明らかにしたもので、十七日に開かれる理事会で正式決定する。明大の特別功労賞は元全日本チャンピオンの曾根康治や東京五輪の銀メダリスト、神永昭夫を育てた姿節雄師範が七月六日に初受賞しており、吉田は二人目になる。

## 本命小川 銀に終る

バルセロナに向けて満を持していた小川は、一回戦から好調そのものだった。全日本選手権の時にくらべて攻めに躊躇がなかった。準決勝のドーレ（フランス）、決勝のハハレイシエビリ（旧ソ連）とはこの一年の間に戦っており共に勝っている。我々はこれまでの試合内容から、ドーレの若さの方にむしろ警戒感を持っていたが、変形の内股を寄せつけず、体落から何んなく抑えた時には、決勝のあの結果は想像出来なかった。

ハハレイシエビリにはこれまで二勝、一九九一昨年の世界選手権無差別決勝で見せた小川の豪快な体落しは、いまだに脳裏に焼きついている。

しかし、好事魔多し、やはりオリンピックには魔物がいた。小川が一回も攻撃しないうちに終わったあの決勝戦はそう考えざるを得ない。棒高飛びのレコードホルダー、常勝ブカがよもやの予戦失格で破れたのも正にこれだろう。

小川 総合勝ち バッシン（ゲーム）

小川、いきなり足をとってくるバッシンをつぶして寝技にいく、バッシンかろうじ

て場外にのがれるが、このプレッシャーで戦意を失い逃げ回る一方、注意、警告から総合負け。

小川 内股 オブウォゲ（ケニア）

ガツシリした体格のケニア選手だったが、小川に引きつけられて防衛一方となる。二度目の内股が鮮やかに決まる。一分。

小川 内股 バルネバル（ベルギー）

長身からの大内刈で勝ってきたバルネバルはヨーロッパ以外の国際大会でも活躍しているベテラン、前に出て勝負にくる。緊迫した試合が予想されたが、二分過ぎに見せた小川の内股であっけなく勝負が決まった。一分すぎまで互いに手さぐり状態が続き、漸く双方ガツプリとなった瞬間、引き手の方向へ誘い大きく飛ばした。

小川 合せ技 ドービル（フランス）

ドービルは二十三歳、大内刈と内股の連絡を得意とし、積極的な攻めの柔道で上がってきた。小川とは昨年の嘉納杯国際であ

たって「有効」で敗けているが同大会で小川に最も善戦した選手。挑戦者らしく真向から攻め会場から大きな拍手が上がる。一分すぎ得意の大内刈からケンケン内股に入り再び場内がわくが小川は引き手を切って体勢をととのえる。なおも出ようとする出ばなを小川は小さなモーションからこの日はじめての体落しを見ればタイミングがびたり、きれいに横転して「技有り」。機がささず崩れ横四方に決めて合せ技一本。まさに快勝だった。

ハハレイシエビリ（ソ連） 合せ技 小川

ハハレイシエビリの得意は相手後帯をとっての釣り腰、そこから変化する内股である。無造作に帯をとらせたところに、これまでの対戦経験が悪い方に出たといえる。しかし、それよりも「技有り」をとられてからの心理的動揺の激しさの方が悔やまれる。時間は十分にあったのだから、まさに自滅であったといえよう。勝負は水ものである。



試合は動きが少なく膠着状態、五分過ぎ  
両者「警告」となる。後半両者やや手数が  
多くなり、金野の大外を小川返すが不十分。  
小川の内股が場外となり中央に戻って組み  
合って間もなく小川奥襟を取って頭を下げ  
させ瞬間足車をとばせば、よほどタイミン  
グが良かったのだろう金野なすところなく  
飛んで鮮かな「一本」となる。

バルセロナ五輪、嘉納杯決勝で苦杯を喫  
した小川、その復活ぶりが注目されたが、  
絶好調とは言えぬまでも、抜群の強さで優  
勝を飾り見事五連勝の偉業を達成した。

#### 全日本選手権大会出場者

小川直也、大漣賢司、鉄谷竜三、松本  
昌広

#### 全日本選抜体重別選手権大会

6月13日 福岡市民体育館

60 kg級

優勝

園田隆二(明治大学)

95 kg超級

優勝

小川直也(JRA)

71 kg級

準優勝

秀島大介(JRA)

78 kg級

三位

鉄谷竜三(明治大学)

#### 全日本学生柔道体重別選手権大会

6月26日 日本武道館

78 kg級

優勝

鉄谷竜三(明治大学)

#### 第8回太平洋柔道選手権大会

6月6・7日 ニュージールランド

95 kg超級

優勝

大漣賢司(JRA)

#### 第18回世界柔道選手権大会

9月30～10月5日 カナダ・ハミルトン市

#### 輝く世界チャンピオン園田隆二

第十八回世界選手権大会がカナダ・ハミル  
トン市で開催され明柔から学生の園田隆二、  
OB秀島大介、吉田秀彦、小川直也が出場し  
た。

成績は次の通り。

60 kg級

優勝

園田隆二(明治大学)

#### 〔準決勝戦〕

園田隆二  
(日本・明大)

優勢勝  
(有効)

トラウトマン  
(ドイツ)

#### 〔決勝戦〕

園田隆二  
(日本・明大)

優勢勝  
(技有り)

グゼイノフ  
(アゼルバイジャン)

グゼイノフはバルセロナ・オリンピックの  
チャンピオン、園田真向から攻め一分すぎ、  
小外刈で効果、グゼイノフすぐ反抗し足払い

で有効、しかし、園田臆せず攻めかえし大外刈で「技有」をうばう、二分十二秒。以後園田は袖釣込腰、足払、大外刈、グゼイノフは払腰、内股と激しく攻め合うが共に決め手なく時間となり、園田の世界チャンピオンが決定した。

「技有」をとりながら最後まで受けの態勢をとらなかつた攻撃柔道に感服。

78 kg級

準優勝 吉田秀彦 (新日鉄)

71 kg級

三位 秀島大介 (JRA)

無差別級

三位 小川直也 (JRA)

## 明大の技 秀島大介の小内刈

小内刈や大内刈は相手のふところにいかに飛び込むかで技の効果が決まる。

大内刈は多少間合いが広くてもケンケンで追い込むことが出来る。小内刈も同じような攻め方をする者がいないではないが、自身のバランスを崩す危険がとれない理づめの攻撃とはいえない。秀島の小内刈は相手の股間にはまりこむように接近して放たれる。

右と、右の相組みには小内掛けぎみになり一本背負、すくい投げに連動する。右と右のケンカの場合には釣り手をとった瞬間の技となる。

このふところへ飛び込む技術は、間合いをとる右の釣り手の使い方のうまさにあるのだが、一言でいえば秀島のこの右は強烈である。軽妙な足さばきと釣り手の偶力で自分の間合いをつくり一瞬にふみ込むのだが、七二kgの秀島が倍近い体重の相手とガツプリ組んで戦えるのは、この黄金の右があるからだろう。重量級にもまれな二四〇kgという背筋力の数値をきけば秀島の柔道が納得できる。



黄金の右釣り手を見せる秀島

## 大漣賢司の大外刈

大漣賢司は平成四（一九九二）年の全日本選手権大会に初出場で準優勝。学生でしかも初出場の彼が、ここまでやると予想したものは少なかった。その一回戦、対戦相手の関根選手が彼の右大外刈りでふっ飛んだ時、会場は大きくどよめいた。当然だろう、関根選手については「小川をたおして宿願を果たすのでは―。」と書いた新聞もあったのだから。

早々と関根サイドを落胆させたのだが、この時点ではまだ彼の決勝進出は予測されていない。しかし、小川は「大漣がくる!」と思っただろう、さすがである。結果、久々の同門決勝となり我々を大いに楽しませてくれた。

大漣の大外刈は、いわば「伝家の宝刀」である。故にこれが出るのは試合の中盤からである。しかも計算通り崩れない時にはかけない。「必殺の技」でもある。彼の柔道はガツプリの左で、大外刈、内股、支釣込足、大内刈、谷落と技は多彩。その左組みから放たれる右技であるから試合技としては実に効果的である。その辺りを少し説明してみる。ポイントはそれまでの釣り手を引き手に、引き手を釣り手に変化させる指と手首の使い方にノ

ウハウがあると思う。

左右のケンカの場合でいえば、相手を自分の右横、または前にふみ出させ（ケンカの組手だから自分の軸足の左足はすでに相手の右足に接している）体を入れかえるように右足をふり入れて刈り込む、この時相手の内ソデをとっていた引き手がひと握り前エリ近くに握りなおされ右大外刈りの釣り手の動作に変わっている。エリをとっていた左手は内ソデ近くに持ち変る。体のさばきは丁度相撲の「よびもどし」をかける時の動作になる。はじめから相手を後方に追い込んでかけるのではなく、まず前に崩し、次にまるく、しかも一瞬に重心を逆の方向、すなわち後方にもっていく。軽、中量級には見られる動きだが重量級にとっては高等技術である。また、ソデ口を引き手にとったガツプリの左組みから動きをとらえて一瞬に右片エリにもちかえ足車にかける変化も身につけ技の幅を広げた。



伝家の宝刀、大漣賢司の大外刈

## 第43回全日本学生柔道優勝大会

11月2・3日 大阪府立体育館

ベスト8で敗退

〔準々決勝戦〕

明治大学 0-3 日本大学

## ドイツ国際柔道大会

5月10日 ミュンヘン

71 kg級

優勝 秀島大介 (JRA)

## 講道館杯全日本柔道体重別選手権大会

4月3日 警視庁武道館

60 kg級

優勝 園田隆二 (明治大学)

## 全日本選抜柔道体重別選手権大会

6月12日 福岡市民体育館

60 kg級

三位 園田隆二 (明治大学)

## 正力杯全日本学生体重別選手権大会

6月25・26日 日本武道館

60 kg級

二位 園田隆二 (明治大学)

78 kg級

三位 鉄谷竜三 (明治大学)

## 嘉納杯国際柔道大会

11月25日 幕張メッセ

60 kg級

優勝 園田隆二 (明治大学)

## 全日本柔道選手権大会

4月29日 日本武道館

吉田、小川の六連覇をはばむ

準決勝戦六連覇を狙う小川と同門吉田との対戦となる。両者必死の攻防をくりかえし時間となり判定は赤白に分かれたが主審は吉田の勝ちとする。小川準優勝。

全日本選手権大会出場者

小川直也、吉田秀彦、大漣賢司、松本昌広

明大の技

## 松本昌広の内股

松本昌広は平成三(一九九二)年、四年明大連覇の立役者。決勝戦で平成三年は大外刈、四年内股とともに一本で決めた。

松本柔道の素晴らしさは重量級でありながら中量級の動きが出来るということだろう。したがって技は多彩で攻めの幅が広い。

内股は彼の少年時代からの得意技である。内股といえど何といっても吉田秀彦だが、引き出し、引きつけ、跳ねが見事に連動する先輩吉田の技に一番近いものをもっているのは松本だろう。ただ左組み同士、特に左変形の相手に対する攻めは吉田に一日の長があるようだ。しかし左右のケンカになると松本は吉田に匹敵する技の切れを見せる。松本は右の相手には必ずつり手を下からとり手首を十分に使って間合いをはかる。重量級（一一〇kg）とはいえ、一七八cmの身長を考えればこれは極く当然の組み手なのだが、奥襟から背中あたりに引きつけてかけるのが主流となっている。現在の内股や払腰、特に重量級においてその傾向が顕著であることを考えれば妙なことが正攻法のこの組み手が彼の柔道の特徴といえる。この組み手になると松本にとって相手の身長、体重、体型は問題でなくなる。引き手は外袖、内袖、内袖奥の襟、とこの点も吉田ゆずりである。最近はいわゆる超デブ対策として奥襟を深くとって思いきり前に引き崩し、浅く跳ね上げながらケンケンで側方にかけて崩す技もある。これはこれで理にかなった崩しであり、掛けである。



内股は少年時代からの得意技だった松本

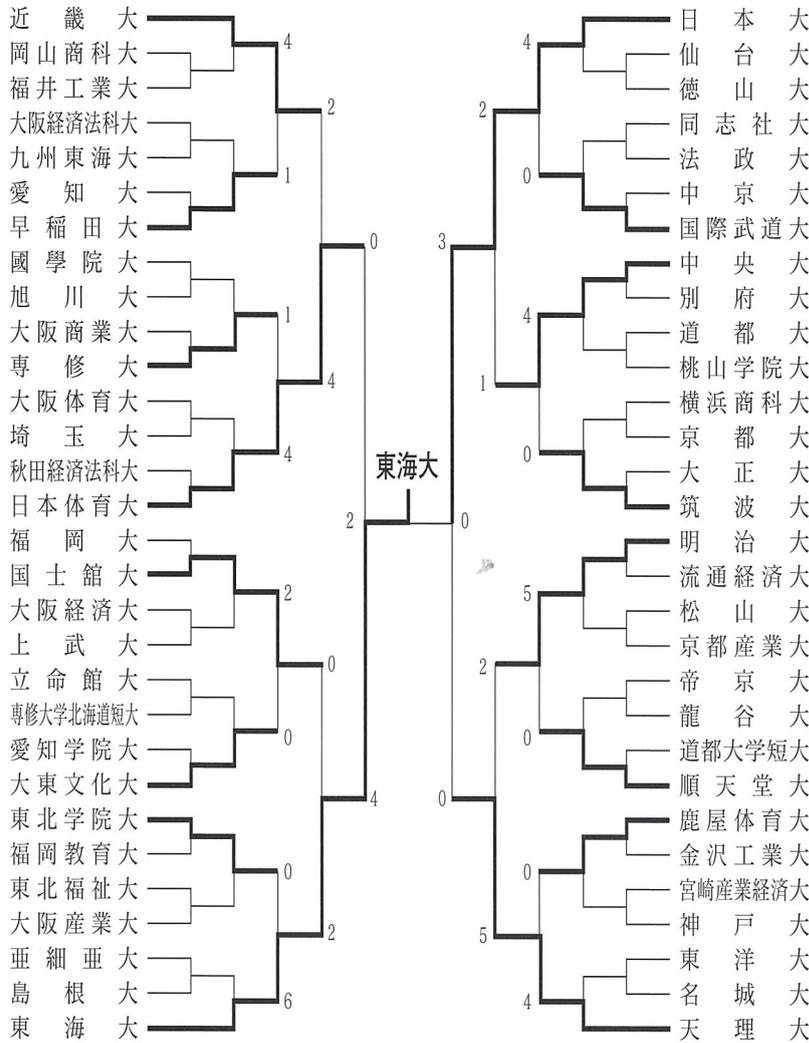
# 闘魂の記録 1995 (平成7) 年

第44回全日本学生柔道優勝大会  
11月2・3日 大阪府立体育館

〔準々決勝戦〕

天理大学 2-5 明治大学

天理に敗れる



世界柔道選手権大会

9月28～10月1日 幕張メッセ

秀島大介、世界チャンピオンに

第十九回世界選手権大会に出場した明柔選手は小川、吉田、秀島、園田、阿武の五名で男子の場合代表選手八名中半数を占めたことは特筆できるが優勝は秀島だけとやや期待はずれであった。女子では明大柔道部創部以来初の紅一点部員、阿武教子が無差別級と七二kg級に出場し健闘したが二階級とも五位とまりだった。

阿武は体格差を克服し日本女子柔道の水準高揚に精進を重ねてもらいたい。

71 kg級

優勝 秀島大介 (JRA)

86 kg級

二位 吉田秀彦 (新日鉄)

95 kg超級

三位 小川直也 (JRA)

60 kg級

三位 園田隆二(明治大学)

女子 78 kg超級・無差別級

ベスト8 阿武教子(明治大学)

### 全日本選抜柔道体重別選手権大会

5月21日 福岡市民体育館

60 kg級

優勝 園田隆二(明治大学)

71 kg級

優勝 秀島大介(JRA)

86 kg級

優勝 吉田秀彦(新日鉄)

### フランス国際柔道大会

2月10~12日 フランス・パリ

86 kg級

優勝 吉田秀彦(新日鉄)

### 嘉納杯国際柔道大会

11月26日 幕張メッセ

86 kg級

優勝 吉田秀彦(新日鉄)

### 全日本柔道選手権大会

4月29日 日本武道館

小川昨年の無念を晴らす  
六回目の優勝

〔準々決勝戦〕

小川直也 合せ技 増地克之

(JRA)

〔準決勝戦〕

小川直也 優勢勝 養父直人

(JRA)

〔決勝戦〕

小川直也 横四方固 篠原信一

(JRA)

五分五十秒共に攻めがとまって「注意」となる。その後篠原が左をのびし組みにくる

ところ、小川両手でこの左腕をきめながら支釣込足にいけば篠原たまたま崩れ落ちる。上になった小川がそのままガッチリと横四方に固めれば、篠原まったく動けず「一本」。

昨年の屈辱を見事にはねのけ六回目の優勝を飾った小川の実力に瞠目する。

### 全日本選手権大会出場者

小川直也、石田輝也、矢作和久、松本昌広

## 第45回全日本学生柔道優勝大会

11月2・3日 大阪府立体育館

決勝、同点内容差に泣く

〔一回戦〕

明治大学 7-0 甲南大学

〔二回戦〕

明治大学 7-0 別府大学

〔三回戦〕

明治大学 5-0 国際武道大学

〔準々決勝戦〕

明治大学 3-3 日本体育大学  
(内容勝)

〔準決勝戦〕

明治大学 3-2 近畿大学

〔決勝戦〕

明治大学 1-1 東海大学  
(内容負)

高山一樹Ⓞ	有効	深川幸太郎
井上智和	引分	小塚義隆
猿渡琢海	引分	繁昌久哲
天部健二	燕返し	○米沢大輔
吉永喜史	引分	福永智幸
赤井沢一晴	引分	上水研一郎

## 全日本学生体重別選手権大会

6月22日 日本武道館

95kg超級

二位 猿渡琢海(明治大学)

## 全日本ジュニア体重別選手権大会

11月16日 講道館

78kg級

優勝 奥村俊樹(明治大学)

## 全日本柔道選手権大会

4月29日 日本武道館

小川強し、七回目の天皇杯

〔準決勝戦〕

小川直也 横四方固 賀持道明  
(JRA) (日太)

〔決勝戦〕

小川直也 掬投 三谷浩一郎  
(JRA) (蓮路公団)

小川前に出て圧力をかけ払釣込足、前に引き出しての体落と果敢に攻めたてる。今度は三谷が思い切って大外を放つが小川待っていたかのようにガッチリと受けとめ、すかさず右手で相手の左脚をかかえ撥ね上げるように掬投げいけば三谷なすすべなく背中から落ち「一本」。二分七秒、堂々の二連覇、七度目の優勝を飾った。

全日本選手権大会出場者

小川直也、松本昌広



# 闘魂の記録 1997 (平成9) 年

## 第46回全日本学生柔道優勝大会

10月4・5日 日本武道館

準々決勝、代表戦で破れる

〔二回戦〕

明治大学 7-0 岡山商科大学

〔三回戦〕

明治大学 4-1 筑波大学

〔準々決勝戦〕

明治大学 3-3 日本大学  
(代表戦負け)

優勝 日本大学

日本大学 5-1 国士舘大学

## フランス国際柔道大会

2月7〜9日 パリ

女子72kg級

優勝 阿武教子(明治大学)

## チェコ国際柔道大会

3月8・9日 プラハ

78kg級

優勝 奥村俊樹(明治大学)

## 全日本女子柔道体重別選手権大会

4月27日 国立代々木競技場

72kg級

優勝 阿武教子(明治大学)

## 全日本学生柔道体重別選手権大会

6月21日 日本武道館

95kg級

優勝 井上智和(明治大学)

## 全日本選手権大会出場者

石田輝也(三位)、吉田秀彦、猿渡琢海、中浜真吾

## 世界女子柔道選手権大会

10月10日 フランス・パリ

明大阿武、世界の頂点に!

72kg級

優勝 阿武教子(明治大学)

〔一回戦〕

阿武教子○ 一本背投 ミコービツク  
(日本・明大) (ユーゴスラビア)

〔二回戦〕

阿武教子○ 合せ技 リッター  
(日本・明大) (ルーマニア)

〔三回戦〕

阿武教子○ 背負投 ラムファルジー  
(日本・明大) (ハンガリー)

〔準決勝戦〕

阿武教子○ 横四方面 エソンベ  
(日本・明大) (フランス)

〔決勝戦〕

阿武教子⊕ 優勢勝 ルナ  
(日本・明大) (キューバ)

序盤から両者激しい組手争い、中盤阿武、小内から背負、また大内刈と攻め、ルナは両袖からの低い背負投げを狙うが共に効果な

し、終盤、場外際にもつれたところを阿武がタイミング良く大内刈を放てば「有効」となる。そのまま時間となり、見事優勝。

### 明大の技 猿渡琢海の大外刈

猿渡の大外刈には大別して二つのパターンがある。

重量級でありながら中量級並みのスピードを有する体捌きから間断なく繰り返し出される技の流れのなかで決め技として放たれる大外刈。そして、左合い四つの相手が掛けてきた大外刈を、投げられる間際と見える状態から払い腰気味に豪快に切り返す大外返し、である。

前者のパターンには左刈足を相手左脚に浅めに引っ掛けることにより動きを封じたうえで刈り取る方法と、相手体を左隅側に充分に崩しながら体をあずけて大きく刈り倒す方法があり、相手の体格や動きの素早さによって使い分けることとなる。何れにしても、まさしく勝負を「決める」技であるからベンチサイドとしては安心して見ていられる。

一方、大外返しは決まる時こそ豪快で胸の

すく思いとなるが、一步間違えば命取りとなるから見ているほうはハラハラである。

しかし、天性の柔軟性で相手の技を凌ぎながら、やや左後方に滑らせてしつかりと畳をグリップした右軸足を中心に、相手を根こそぎ投げ捨てる猿渡の大外返しは決め技としての大外刈よりも技術的には絶妙と言ってよい。

無論、この返し技は狙い澄まして決まる類のものでもなく、意識的に身に付けたものでもない。猿渡が明大の下級生であった頃、小川直也、大瀧賢司、松本昌広といったこれ以上ない強力な先輩達の胸を借りて繰り返し猛稽古により自然と身に付いた技である。



大外刈で「決める」猿渡

## 第47回全日本学生柔道優勝大会

10月3・4日 日本武道館

### 六年ぶりの凱歌

第四十七回全日本学生柔道優勝大会が十月三、四日の両日、日本武道館で行われ、明治大学が国士館大学を破って優勝、最多優勝回数を十五回に伸ばした。

吉田監督、秀島助監督の気魄、若さが選手に乗り移ったかのような快進撃で昨年代表戦で涙をのんだ日大に完勝、東京大会同点内容負けの中大にも借りを返して決勝に。相手は昨年が続いて決勝進出となった国士館大学だったが、明治の迫力は衰えず、先鋒、次鋒と連取して波に乗り、五将戦の段階で国士館初優勝の望みを断った。予想は東海大、日大、天理大、中大の順であったが、終って見れば、副将、大将戦まで勝負を持ち込んだ試合なし、という明治の完勝。猛練習の結果が遺憾なく発揮された大会であった。

優秀選手 (明大関係)

猿渡琢海、吉永喜史



6年ぶり、完勝で15回目の優勝を飾った明大チーム

### 主将猿渡「必ず優勝」の公約を果す

〔準決勝対中大〕

東京大会で、同点内容負けを喫している中大戦、吉永、現学生柔道界のトップレベルにある高橋に対し攻め込んでの引き分け、高橋の強力な「左」を完封した。猿渡、動き回る廣川を前に崩し、内股「有効」から崩れ上方固めに決める。落合、開始早々の体落で「有効」その後も先手先手と攻めて、中村に攻めの切っ掛けを与えず試合内容としては完勝、大きい勝点となる。あせりぎみに掛けてくる相手をじっくり捌いていた高山、払い釣り込み足で一本見事に中大戦の勝利を決める。勝ちが決まってからの二失点は気抜けしたとはいえ要反省。

明治大学 3-2 中央大学

奥村俊樹	引分	落合 功
吉永喜史	引分	高橋宏明
猿渡琢海	崩上西方固	廣川充志
落合幸治	優勢勝	中村陽一
高山一樹	崩上西方固	大村昌弘
中浜真吾	崩上西方固	○清水隆博

三木隆二 払腰 ○三矢 諭

国士館大学 4-2 天理大学

〔決勝対国士館大〕

奥村、立ちあがりから積極的に攻め「警告」をとる。猿渡、一四〇kgの巨漢、市之渡を内股十八秒。三木、大内刈り「有効」で失点を返すが、ブザー直前の背負いが「掛け逃げ」とされる。絶好調の高山、「注意」「警告」と追い込み最後は上四方固め、「総合勝」の一本。ここで決まるかの五将戦、中浜、早々に大内刈り「有効」、相手の力と自身の肩の故障を計算しその後を難なく捌いて勝つ、優勝決定。吉永、ダメ押しの一「一本勝」。すでに勝利が決まって、勝負に出た落合、五秒ルールの判定に怒る。

明治大学 5-2 国士館大学

奥村俊樹○ 警告 高谷 渡  
猿渡琢海○ 内股 市之渡秀一  
三木隆二 警告 ○秋田信吾  
高山一樹○ 総合勝 高橋朋也  
中浜真吾○ 優勢勝 塘内将彦  
吉永喜史○ 合せ技 近野貞治

落合幸治 反則 ○斉藤制剛

### 正力杯国際学生柔道大会

1月10・11日 日本武道館

100kg級

優勝 井上智和(明治大学)

井上智和 小外刈 金 岷秀  
(韓国)

### フランス国際柔道大会

2月6・7日 パリ

100kg超級

三位 猿渡琢海(明治大学)

### オーストリア国際柔道大会

9月24日 ウィーン

100kg級

三位 井上智和(明治大学)

### 全日本ジュニア体重別選手権大会

9月13日 講道館

66kg級

優勝 野中一平(明治大学)

全日本選手権大会出場者

吉田秀彦、大漣賢司、山崎浩一、猿渡琢海



正力杯国際100kg級で優勝した井上(右)と韓国国際無差別級で優勝した猿渡(左)

## 第48回全日本学生柔道優勝大会

6月26・27日 日本武道館

明治、連覇ならず

〔準決勝戦〕

明治大学 2-2 中央大学  
 国士館大学 4-2 天理大学

〔決勝戦〕

明治大学 2-3 国士館大学  
 矢寄雄大 ○ 反則 高橋朋也  
 野中一平 横四方固 ○ 近野貞治  
 棟田康幸 ○ 反則 市之渡秀一  
 増村一人 大外刈 ○ 鈴木桂治  
 中浜真吾 引分 加藤博仁  
 高山一樹 引分 塘内将彦  
 落合幸治 優勢勝 ⊖ 齊藤制剛

明治は強力一年生コンビ棟田康幸、矢寄雄大が確実にポイントを計算出来るが層の薄さに死角があった。失点二は覚悟しなければならぬ布陣であった。

## 第1回全日本学生柔道体重別団体優勝大会

11月6・7日 大阪府立体育館

準々決勝で敗れる

初の学生体重別団体戦が行われ、明治は準々決勝で2-4で天理大に敗れた。優勝は国士館大学。

## 世界柔道選手権大会

10月7〜10日 イギリス・バーミンガム

吉田チャンピオンに、全試合圧勝!

〔一回戦〕

吉田秀彦 内股 ハツシヤ  
(日本・新日鉄) (チェニジア)

〔二回戦〕

吉田秀彦 内股 グガヴァ  
(日本・新日鉄) (ケルジア)

〔四回戦〕

吉田秀彦 技有り デスパイン  
(日本・新日鉄) (キューバ)

〔準決勝戦〕

吉田秀彦 体落 ホラノト  
(日本・新日鉄) (フランス)

〔決勝戦〕

吉田秀彦 内股 フローレンス  
(日本・新日鉄) (モルドバ)

開始五十秒吉田内股から払腰に変化して大きく崩すがポイントにならず。一片襟組みでフローレンスに指導、吉田引き手を徹底的にさらわれていたが、肩口に持ちかえて内股を放てばフローレンス高々と舞い上って文句のない一本。

日本チーム最年長三十歳の吉田、バルセロナ五輪の優勝以来、ハミルトン、幕張と二度決勝で敗れ世界選手の優勝には縁がなかった。年齢からみて今回が最後という気持で挑んだに違いない。スタミナが心配されたが、終って見れば落ちついて相手を見ることが出来るベテランの良さが随所に見られ、ほぼ完璧な試合内容であった。

## 世界女子柔道選手権大会

10月7〜10日 イギリス・バーミンガム

**阿武教子、世界二連覇!**

78 kg級

〔二回戦〕

阿武教子 ○ 反則 シューメン・リン  
(日本・警視庁) (タイペイ)

〔三回戦〕

阿武教子 ○ 合せ技 サミュゲル  
(日本・警視庁) (スペイン)

〔準決勝戦〕

阿武教子 ⊖ 注意 カン・ミン・チュン  
(日本・警視庁) (韓国)

〔決勝戦〕

阿武教子 ○ 大内刈 イン・ユーフェン  
(日本・警視庁) (中国)



世界柔道選手権女子78kg級で優勝した阿武教子

若手のイン元氣一ぱい、阿武仲々良い組手になれず先に指導を受ける。その後大内、背負と攻めるがうまく捌かれる。後半に入り、阿武相手の動きをつかみはじめたか阿武俄然動きがよくなり思い切って大内に行けば見事に決まって「一本」。阿武の世界連覇が成った。

**ロシア国際柔道大会**

1月23・24日 ロシア・モスクワ

81 kg級

三位 鉄谷竜三(警視庁)

**全日本柔道選手権大会**

4月29日 日本武道館

一年生棟田康幸、準優勝  
 OB猿渡も三位に

全日本選手権大会出場者

猿渡琢海、赤井澤一晴、井上智和、棟田康幸

十八歳の棟田、初出場ながら積極的な攻めの柔道で観衆目をみはる中決勝に進出、連覇を狙う篠原に臆せず挑んだが大外を返しここねて技有りを失ったが大器の片鱗を十分に見せてくれた。

**ユニバーシアード大会柔道競技**

7月8〜12日 スペイン・マジヨルカ

棟田優勝、猿渡三位

100 kg超級

優勝 棟田康幸(明治大学)

無差別級

三位 猿渡琢海(明治大学)

**全日本ジュニア体重別選手権大会**

9月21日 講道館

90 kg級

優勝 矢野雄大(明治大学)

# 闘魂の記録 2000 (平成12) 年

## 第49回全日本学生柔道優勝大会

6月24・25日 日本武道館

### 準優勝

〔二回戦〕

明治大学 5-0 松山大学

〔三回戦〕

明治大学 4-2 国際武道大学

〔準々決勝戦〕

明治大学 4-2 日本体育大学

〔準決勝戦〕

明治大学 3-2 天理大学

〔決勝戦〕

明治大学 1-5 中央大学

## 第2回全日本学生体重別団体優勝大会

11月26日 尼ヶ崎体育館

### 優勝!

昨年から始まった学生柔道の体重別団体優勝大会が十一月二十六日尼ヶ崎体育館で第二回大会が行われ、明治大学が優勝した

〔二回戦〕

明治大学 4-1 東和大学

〔三回戦〕

明治大学 2-1 国際武道大学

〔四回戦〕

明治大学 3-3 東海大学  
(内容勝)

〔準決勝戦〕

明治大学 4-2 日本体育大学

〔決勝戦〕

明治大学 2-2 筑波大学  
(内容勝)

中村裕次郎	引分	後藤信雄
松原豊	引分	篠崎悠
野中一平	引分	金丸雄介

芳垣雅継 反則 ○小野卓志

矢嵩雄大 ○ 小外刈 野口達志

中浜真吾 ○ 大外刈 杉浦幹浩

落合幸治 警告 ○生田秀和

## 全日本学生体重別選手権大会

10月7・8日 日本武道館

100 kg 超級

優勝 棟田康幸 (明大)

90 kg 級

優勝 矢嵩雄大 (明大)

66 kg 級

三位 西野公章 (明大)

## フランス国際柔道大会

2月12・13日 フランス・パリ

100 kg 超級

優勝 棟田康幸 (明大)